キャンパスに「活気の嵐」舞う

新大祭50周年記念

地域の笑顔が広がる
多彩な催し　市民続々と

十月十七、十八の両日、第五十回新大祭が新潟市西区の新大五十嵐キャンパスで行われた。一九五九年から毎年欠かさず行われてきた新大祭は今回で五十周年を迎えた。今年のテーマはずばり「50嵐（いからし）」。五十回目の学園祭に、みんなで活気の嵐を起そう、という意味が込められている。

目玉企画の一つである、吉本のお笑い芸人ライブには整理券を求め長蛇の列ができ、十分間で売り切れるほどの人気だった。

会場の五百席はすぐに満員となり、入場制限のために入れなかった人も多くいたという。さらに同日の、新大一の「美女」を決める、プリンセスコンテストにも多くの人が集まり、大盛況だった。

五十周年の特別企画として、総合案内所の前にはキャンパスを訪れた多くの人たちの写真が飾られた。地域の人々や中高生など、学外からも多くの人が新大祭へ足を運び、興味深そうに学生たちの活動に見入る姿があった。

西門から教育学部棟への道にも店舗を構える初めての試みが行われた。今回は両日合わせて約一二〇店舗が軒を並べ、来訪数は初日約六千人、二日目約四千人までになった。

二日目は雨に見舞われたが、トラブルもなく、最後まで学園祭を行うことができた。アーティストUNISON SQUARE GARDENのコンサートではアンコールが二回も行われる程盛り上がった。この熱気に時折太陽も顔を見せ、キャンパスを訪れた人たちは五十嵐のお祭りを楽しんでいた。

各集落の人と学生の交流が広がり、復興五年が新大祭五十周年をさらに活気づけた

講義「地域文化論」で新大祭の特集記事を作成致しました。
編集者　中村剛士　菊池美央　水戸淳美　坂井俊介　小林あゆみ

復興エネルギー注入
被災集落ときずな深める

農学部前では五年前に中越地震で被災した集落の人と、それらの集落と交流を続けているサークル「越後８（えちごや）」による特産品販売などが行われていた。

販売会に参加したのは小千谷市や魚沼市、川口町の四つの集落。コシヒカリやエゴマの葉といった農産物や木沢焼などの民芸品が並んだ。

また、会場の一角では、稲わらによる草履の壁掛け作り体験も行われ人気を博していた。指導に当たったのは、川口町のわら細工職人である星野幸一さんと星野福太郎さん。二人はそれぞれ名前の一字を取り「幸福コンビ」の愛称で地元の人々に親しまれている。

会場には各集落の人と学生の活気と笑顔で満ち、震災からの復興を全身で感じることができた。

越後８のサークル長を務める吉岡さん（農学部四年）は、「集落の方に遠くから来てもらって、つながりを再確認できた。震災から五年たっても頑張っていることを分かってもらいたい」と話した。

越後８は、中越地震から丸五年という節目の年を前に昨年創設されたサークル。震災からの復興を胸に地域との繋がりを持ち続けたいという学生の思いから、被災した集落との交流を行っている。

十八日には、理学部前・災害復興センター前・農学部前の三カ所で、越後８のほか川口町木沢集落の町おこしグループ「フレンドシップ木沢」などによって、太鼓の演奏に合わせた盆踊りも披露された。

盆踊りを見ていた新潟市の五十代男性は、「とても完成度が高く、良くできていた」と話し、震災に屈しない集落の元気な姿に感慨深げだった。

学生と各集落の人たちはこの催しを通じきずなをさらに深めるとともに、被災集落の復興を強くアピールする二日間となった。

熱く、温かく
教室がライブハウスに

写真＝ギターを演奏する小松さん（中央）

新潟大学で活動する軽音楽団体やロックバンドなどによる「ライブハウス」が教養棟にオープンした。五団体総勢約二五十人が、二日間、のべ約十五時間に渡ってそれぞれの想いを込めた音楽を会場に響かせた。

会場では各団体がそれぞれ一つの教室にライブハウスを展開する。普段は講義で使用されている教室がこの日は一転、暗幕やライト、大きなアンプに迫力あるドラムセットなどによってライブハウスに様変わりした。

年に一度のイベントに、学生や市民のほか、多数のＯＢが足を運んだ。会場のあちこちで再会を懐かしむ姿が見られ、中には後輩とステージで一緒に演奏するＯＢの姿も。普段は会社員としてキビキビ働く背中もこの時ばかりは学生時代に戻って乗りのいいリズムを刻んでいた。

本番前、出演者の小松宏平さん（工学部二年）は「来場してくれた全ての人に楽しんでもらえるよう演奏したい」と意気込みを語った。

会場のＢＧＭが止んでいよいよライブスタート。最初は控えめだった会場のボルテージも曲順を追うごとに盛り上がりを見せた。学園祭の自由な雰囲気と懐かしい顔ぶれ、多くの充実した笑顔に囲まれた会場は、薄暗く人ごみと熱気で溢れる普段のライブハウスの印象とは異なり、激しくも温かな空気に包まれていた。

創立60周年で医学祭も同時開催

旭町キャンパス「医恋」の場誕生

旭町キャンパスでも第四十三回医学祭が行われた。例年、新大祭よりも早い時期に行われている医学祭だが、今年は新潟大学創立六十周年ということで、新大祭、また歯学部の歯学祭と同日開催にした。

テーマは、「医恋（いこい）～医学に恋する憩いの場」。医療従事者と患者の間にいる医学生が、医療を安心して受けられるような憩いの場を作りたいという願いが込められている。

学生が教室や部活動の仲間たちと出店する模擬店には、医学部生だけではなく、近隣住民や親子連れ、また大学病院に通う患者らも訪れ、秋晴れの下ににぎわいを見せた。

模擬店の並ぶ広場には、休憩所も設けられ、「お年寄り優先席」で休憩していた市民は、「このような休憩所があって嬉しい。若い学生が頑張っている姿に元気をもらえる」と話していた。

ホットドックやクレープなどを売る模擬店の前には列ができ、売り手の学生とお客の市民の間には笑顔の輪が広がっていた。「医恋」のテーマに込められた願い通り、医学生と市民との交流の場になっていた。

患者たちに癒しの調べ

医学部第二体育館では、学生によるステージ企画や、人気バンドによるライブなどが行われた。

トップバッターは、医学部キャンパスを活動の中心としている新潟大学管弦楽団で、シベリウスの交響詩「フィンランディア」など計四曲を演奏した。

楽団は新大生を中心に、県内大学の学生ら約百五十人で構成されている。

毎年、病院の入院患者らも聴きに来るこの医学祭で練習の成果を披露している。今年も、日々活動している旭町キャンパスでの演奏に、感謝の意を込め張り切っている団員の姿が見られた。

トップバッターということもあり、満員の観客いうわけには行かなかったが、親子連れの姿もあり、普段では聴く機会の少ない生のオーケストラを楽しんでいた。

演奏の最後には、部長が観客への挨拶とともに、十二月に新潟市民芸術文化会館りゅーとぴあコンサートホールで行われる同団の定期演奏会の告知を行い、ステージの幕を閉じた。

写真＝医学部前駐車場に並ぶ模擬店（上）と演奏を披露する新潟大学管弦楽団（下）

ふらっと五十嵐キャンパス

祭りだワッ書イ！

教育学部書表現コースの学生による、パフォーマンス書道「ワッ書イ！」が、教育学部玄関前で行われた。会場には、今年の新大祭のテーマである「５０嵐（いからし）」の文字を力強く描いた看板が掲げられ、そこには市民や学生ら多くの観客が集まった。

パフォーマンスは、人が寝転がれるほど大きな用紙に、学生が音楽に合わせて書を描く形で進められ、合計で三作品が描かれた。

中でも、四年生二人による合作「龍虎」は、映画「レッドクリフ」のテーマ曲が会場を中国的な雰囲気で包み込むところ始まった。

二人はＢＧＭに合わせて身体全体を使い激しく筆を動かしたり、手先のみで繊細な線を描いたりと、静と動を見事に調和させながら大きな用紙の上を所狭しと動き回った。

描き出された「龍虎」の二文字は、篆書（てんしょ）と呼ばれる漢字の元になった書体が用いられ、文字でありながらも、龍と虎が対峙し睨み合い、今にもどちらかが跳びかかろうとしている様子を一枚絵にしたかのように見えた。観客は、学生が文字を描く一連の流れと描かれた文字の凄まじい迫力に、思わず息を呑んでいた。

特大サイズの用紙の上で筆を踊らせる学生たち

鏡映描写で大迷走

視覚の不思議を体験

人文学部心理学研究室による「錯覚のワンダーランド」が教育学部棟で行われた。この企画は、錯視図形などの実験器具を使って、人間の視覚の不思議さを体験できるというもの。実験器具の説明や錯視図形の見方、働いているメカニズムなどを、スタッフがわかりやすく説明していた。

一番人気だったのは鏡映描写のコーナーで、時には順番待ちの列ができるほどの人気だった。鏡映描写とは、星型の外周を鏡越しに鉛筆でなぞっていくというものだ。このような手続きを通して、日常とは全く異なる状況を作り出すことが本来の目的である。今回はこの器具を用いて、星を一周するまでのタイムを競うゲーム的な要素も盛り込まれていた。

鏡越しに描くことは、思っている以上に難しい。勝っと賞品が貰えると聞いて張り切っていた人や、他の人がやっているのを見て「簡単そうだ」と言っていた人も、あまりの難しさに戸惑っていた。しかし、体験した人からは「難しかったけど楽しかった」という感想が多く寄せられた。

二日間に渡って行われた企画には、スタッフも驚くほど多くの入場者があった。訪れた人はそれぞれ実験器具に触れ、戸惑ったり笑顔を見せたりしながら非日常的な世界を体験していた。

写真＝鏡の世界に悪戦苦闘する子供たち

画面に映る青春

映画倶楽部が上映

教養棟では、映画倶楽部による上映会が開かれ、若々しく豪快さと繊細さをあわせもった映像が市民らの関心を集めていた。

上映されたのは、同部の学生が制作した映画七本と文学部の学生による映画一本。童話『赤ずきんちゃん』を現代的にアレンジした『The Red Cape』や、付属図書館を舞台に不思議な空間を演出した『Library』など、いずれも学生らしいアイディアと挑戦心に溢れる作品だ。

同部の渡辺さん（人文学部二年）は、「今年は去年なかった来場者へのアンケートを行った。今まで部外の人に映画の感想を聞く機会がなかったので、これを撮影に活かしていきたい」と話した。

映画を見た市民の中には、自身も学生時代に映画を撮っていたという男性もおり、「ハリウッドにはない素朴な良さがある。そういったところは二十年前と変わらない」と話していた。

同部には、約五十人の部員が所属している。毎週火曜日と金曜日に部会を開き、映画の制作や鑑賞を行っている。

写真＝学生の自作映画とそれを観る市民